

2021年4月4日～4月10日 各家庭でのディポーション用テキスト

[静]

頭をたれ ひざをかがめ
申し開きもせず
あるがまを述べ
我を忘れ 御前に語る
神はいとよき方
わが肉はいと悪しきもの
我ひたすら求む
神の休みに入らんことを
渴きを潤され
揺らぐことなき安きを受く
神に向かう熱き思い
いよよ炎を増さんことを

わがたましい
ついに神にとらえられ
心の争い
ついにやむ
* * *
神に守らるる我
楽しきかな
静かなるかな
いとも親しく神に結ばれ
みこころのうちに我ありて
すべてのもの いと穏やかなり

■軽蔑に耐える訓練（1/3）

この人は大工ではありませんか。（マルコ 6:3）

このような物静かな目だたないことばは、その中に込められている骨を刺すような、いわれのない批判を、十分にはあらわしていない。主と同郷の人々がこのナザレ人に対して「大工ではないか」と言ったのは、主に対する賞賛の気持ちからでなく、むしろ、極度に主をさげすむ心からであった。彼らは主を大工として知っていた。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう」（2節）。これが彼らの疑問であった。まことに主は大工であられたのである！

軽蔑に耐える訓練ほど、忍耐力を試みるものは少ない。私たちは、自分に対する陰謀を無視し、当てこすりなどに対しては知らないふりをし、迎合を拒否することはできるかもしれない。しかし、ののしりのことばに耐えることは困難であることを見出す。私たちは軽蔑されることを嫌う。傲慢無礼な態度をとられると卑屈になり、侮辱されればけんか腰になる。

ダビデと、彼より偉大な子孫であられる主イエス・キリストは、軽蔑に耐える訓練をみごとに例証している。ダビデはしばしば試練にあった。そのおのこの場合において、彼の反応は同じではない。その相違は、おそらくその時々事情、それに関係した人々、彼がその試練を耐え忍んだときの年齢によって説明できるであろう。彼のように、私たちもみな、痛烈な侮蔑に直面する。それは心臓の鼓動を激しくし、心を燃え上がらせるが、また、キリストのような平静さを示す機会をもつくり出す。

ダビデは、巨人ゴリヤテの軽蔑を無視した（1サムエル 17:41-46）。ダビデは寂しい羊のおりの中から、獅子や熊との戦いの場から出て来た。彼は目だたない存在であり、世に知られず、名声をとどろかしたこともなく、ほうびを与えられたこともなかった。そして、「ペリシテ人はあたりを見おろして、ダビデに目を留めたとき、彼をさげすんだ。ダビデが若くて、紅顔の美少年だったからである」（42節）。羊飼いの少年が、杖と石投げ器だけを携えて大敵に向かう！エッサイの赤ん坊が、谷間から拾った五個の石を背中の袋に入れて戦う！まだひげも生えていない素足の子供が、その地方でいちばんの大男に挑戦するという！ゴリヤテが「おれは犬なのか。（おまえは）杖を持って向かって来るが」と不満を述べたのも無理はない（43節）。

しかし、この嘲笑に対するダビデの答えは、自分の利害に関する気づかいでもなく、侮蔑に対する仕返しでもなく、実に神に対する信頼の表明である。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ」（45節）。ダビデはペリシテ人ゴリヤテの残忍性を恐れず、彼ののろいのことばに耳を貸さず、その侮辱のことばを気に留めることもしなかった。ダビデは私たちが幼いときに教えられた「棒きれや石は私の骨を折ることがあるかもしれない。しかしことばは決して私に傷を負わせることができない」という格言を、直観的に知っていたのである。